

意識間での親水行為が喚起する場

かつての堀川沿いの賑わいについて考える

名古屋をはじめ堀川沿いの町や村の産業が栄え豊かになることが期待された。

慶応15年（1610～1611）名古屋城建設の工事とともに始まる。全長約6km 幅22～87m当時は一度に多くの物を運べるのは船しかなかった。（米、野菜、魚、塩、木材、など）

川岸には品物を蓄えておく蔵（くら）が建てられ直接船から荷物を運び込んでいった。

歴史的人工物＝堀川

堀川沿いは生活に欠かせないものを売買する商人が沢山住み、豊かな活気溢れる町となった。

明治40年（1907）名古屋港が外国と貿易をする。開港場に指定され、港と市街地を直接結ぶ。堀川を通る船はますます増えてきた。

大正時代までの堀川は清流であり、さまざまな催し物や多くの祭りが川を中心に行われ、人々の憩いの場としても重要な空間だった。

使用目的が明確化している

人々の意識が堀川に集中する

堀川沿いの賑わいの消失について考える

昭和30年（1955）頃からは、トラックが物流の中心となる。

高度成長期には水質悪化が進み、昭和40年ごろはBODが50を超え悪臭、ゴミなど環境悪化により市民が背を向ける川となってしまうていた。

使用目的が不明確化している

人々の意識が堀川から薄れる

堀川沿いの賑わいの再生について考える

排水規制、下水道整備、集中的対策により現在の堀川のBODは6程度と大幅に改善が進んだ。

水質改善が進むと同時に市民の堀川に対する意識も変わり、県と市の共同の下、沿川の市街地整備と一体となった魅力ある水辺空間の形成が図られてきた。

使用目的が不明確化している

人々の意識が堀川に集中する

現代の進化した社会に対して共生していく堀川を考える

これらのプロジェクト進行が現実化してきた中で将来的に堀川は名古屋の顔となる。名古屋のイメージを象徴する存在となる。

名古屋という街を示す媒体として、堀川をイメージ化し、人々が認知する場所性として堀川を活用する。

使用目的が明確化させる

人々の意識を脱構築する

物理的堀川という存在をイメージ化する。

名古屋の中心、広小路通を両断する地形的イメージ

集めて一送り出すという集積流動的イメージ

